



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

卒業研究抄録集(看護学科)(2022.12)令和4年度:

,

認知症高齢者のイメージ-医学生と看護学生の比較-

学生氏名 鈴木歌恋 三枝優希
(指導: 牧野志津 服部ユカリ)

緒言

内閣府¹⁾によると認知症高齢者は令和7年には約700万人、65歳以上の5人に1人の割合になるといわれている。急速な認知症高齢者の増加に伴い、身近で認知症高齢者と関わる機会が増えてきている。

岡村²⁾は地域住民の認知症高齢者に対するイメージ調査において、住民は認知症に対して負のイメージを持っていたことを明らかにした。金ら³⁾は地域住民のおよそ半数が認知症の人との関わりを求めていることを報告しており、一般住民の認知症のイメージは必ずしも良いとは限らない。

西山ら⁴⁾は認知症の症状と介護方法についての知識がある場合は肯定的なイメージであるのに対し、介護方法の知識がない場合は必ずしも肯定的なイメージを持つわけではないことを示した。また、桂⁵⁾らは、看護大学生は学年の進行に伴い、認知症高齢者に対するイメージが肯定的になることを報告している。

このように、看護学生が認知症高齢者に対して抱いているイメージに関する先行研究は散見されるが、他職種となる医学生が認知症高齢者に対して抱いているイメージに関する先行研究は見られない。そこで、医療知識の中でも、症状や治療を中心に学ぶ医学生と症状や生活の援助を中心に学ぶ看護学生という学習背景の違いによって認知症高齢者に対するイメージに差があるのではないかと考えた。本研究の目的は、医学生と看護学生の認知症高齢者に対するイメージの違いを明らかにすることである。学習背景が異なる職種が協働するチーム医療は、他職種理解が欠かせないことから、イメージの差を明らかにすることは重要と考える。

方法

研究対象: 令和4年度B大学医学部に在籍する医学科6年生(以下医学科とする)121名と看護学科4年生(以下看護学科とする)59名を対象とした。医学科は、病態・診療・治療といった医学的知識を評価する共用試験CBT(Computer Based Testing)と臨床実習を終え、一定の認知症高齢者についての知識を得ていることから対象として設定した。看護学科は、高齢者看護学の講義・演習・領域別実習を終え、認知症高齢者の病態生理や症状に合った生活の援助について知識を得ていることから対象として設定した。

調査期間: 2022年8月~9月

データ収集法: Google フォームを用いた無記名自記式質問調査票をメールで配信し、回答を得た。

調査内容: 1. 個人属性(学科、学年、年齢、性別)、認知症高齢者との関わりの有無と内容、祖父母との同居の有無、2. 認知症高齢者のイメージを調査した。認知症高齢者のイメージには古谷野ら⁶⁾のSD法の形容詞対19項目(「暗い-明るい」「好きな-嫌いな」「下品な-上品な」「不活発な-活発な」など)を用いた。各項目に対して、否定的な極から肯定的

な極まで1点から5点とし、点数が高いほど肯定的なイメージを持ち、3点を中立的なイメージとした。

データ分析方法: 基本統計量を算出し、医学科と看護学科の2群に分け、 χ^2 検定、Mann-WhitneyのU検定により比較した。データ解析には統計ソフトIBM SPSS Ver. 24を使用し、有意水準5%未満とした。

倫理的配慮: 本研究は旭川医科大学倫理委員会の承認(承認番号 22029)を得て実施した。調査への協力は自由意思にもとづき、協力の有無にかかわらず、不利益を受けることはないこと、本研究は無記名で回収し統計的に処理することから、個人が特定されることはないこと、データの管理は研究責任者が鍵のかかる場所で10年厳重保管し、その後完全に消去し、この研究の目的以外で使用することはないこと、調査票への回答をもって研究参加への同意とみなすことをGoogle フォームの文頭で説明した。

結果

調査票を180名に学内メールで配付し、医学科53名、看護学科40名の計93名(回収率52%, 有効回答率100%)の回答を得た。医学科の平均年齢は27.6±14.4歳で、看護学科の平均年齢は21.4±0.5歳であった。性別では、看護学科は医学科に比べて有意に女性が多かった。認知症高齢者との関わりは、医学科に比べて看護学科が有意に多かったが、その関わりの内容、祖父母との同居の有無に有意な差はなかった(表1)。

認知症高齢者のイメージについて、医学科では中立的なイメージである形容詞は13個あり、やや否定的なイメージである形容詞は6個、肯定的なイメージはなかった。看護学科では中立的なイメージである形容詞は12個あり、やや否定的なイメージである形容詞が4個、やや肯定的なイメージである形容詞は3個であった。医学科と看護学科の項目ごとの得点では、暗い-明るい($p=0.02$)、頑固-柔軟($p=0.01$)、嫌い-好き($p<0.00$)、きびしい-やさしい($p<0.00$)、弱い-強い($p=0.01$)、無愛想-愛想が良い($p<0.00$)、冷たい-暖かい($p<0.00$)、鈍感-敏感($p<0.00$)で有意な差があり、看護学科の方が肯定的なイメージを持っていた。また、消極的-積極的($p=0.09$)、劣っている-優れている($p=0.05$)、不活発-活発($p=0.05$)でも看護学科の方が肯定的なイメージを持つ傾向にあり、落ち着きがない-落ち着きがある($p=0.09$)の形容詞のみ看護学科の方が否定的なイメージを持つ傾向にあった(表2)。

表1

項目		医学科(N=53) 看護学科(N=40)				P値
		人	%	人	%	
性別	女	21	40	35	88	
	男	32	60	5	12<0.00 *	
認知症高齢者との	あり	45	85	40	100	0<0.00 *
関わりの有無	なし	8	15	0		
(ありの内訳)						
	実習	39	85	36	90	
	その他	7	15	4	10 0.53	
祖父母との同居の	あり	18	34	13	32	68 0.88
有無	なし	35	66	27	68	
χ^2 検定:Fisherの正確確立法(性別、認知症高齢者との関わりの有無・内容)						
χ^2 検定:(祖父母との同居の有無) * :p<0.05						

表2

No	SD法による形容詞対	医学科 (N=53) 看護学科 (N=40)				P値
		中央値	四分位	中央値	四分位	
1	受動的-能動的	2 [1.0, 5.0]		2.5 [1.0, 5.0]		0.19
2	暗い-明るい	3 [1.0, 5.0]		3 [2.0, 4.0]		0.03 *
3	頑固-柔軟	2 [1.0, 5.0]		2 [1.0, 4.0]		0.01 *
4	嫌い-好き	3 [1.0, 4.0]		3 [3.0, 5.0]		<0.00 *
5	消極的-積極的	2 [1.0, 5.0]		3 [1.0, 4.0]		0.09 †
6	劣っている-優れている	3 [1.0, 5.0]		3 [1.0, 4.0]		0.05 †
7	遅い-速い	2 [1.0, 5.0]		2 [1.0, 4.0]		0.27
8	枯れている-みずみずしい	3 [1.0, 4.0]		3 [1.0, 4.0]		0.49
9	きびしい-やさしい	3 [1.0, 4.0]		4 [1.0, 4.0]		<0.00 *
10	下品-上品	3 [2.0, 4.0]		3 [2.0, 5.0]		0.37
11	弱い-強い	2 [1.0, 5.0]		3 [2.0, 4.0]		0.01 *
12	無愛想-愛想が良い	3 [1.0, 4.0]		3 [1.0, 4.0]		<0.00 *
13	地味-派手	3 [1.0, 5.0]		3 [1.0, 5.0]		0.61
14	冷たい-暖かい	3 [1.0, 5.0]		4 [1.0, 4.0]		<0.00 *
15	鈍感-敏感	2 [1.0, 5.0]		4 [2.0, 5.0]		<0.00 *
16	落ち着かない-落ち着がある	3 [1.0, 5.0]		2 [1.0, 5.0]		0.09 †
17	騒がしい-静か	3 [1.0, 5.0]		3 [1.0, 4.0]		0.61
18	さびしい-にぎやか	3 [1.0, 5.0]		3 [1.0, 5.0]		0.29
19	不活発-活発	3 [1.0, 5.0]		3 [2.0, 4.0]		0.05 †
Mann-WhitneyのU検定 * : p<0.05, † : p<0.1						

考察

認知高齢者に対して、医学的知識を有する医学科は中立的からやや否定的なイメージを持っており、症状に合った生活の援助の知識を有する看護学科はやや否定的から中立的、やや肯定的なイメージを持っていた。両者の比較においては、8つのイメージの項目に有意差がみられ、看護学科は医学科よりも肯定的なイメージを持っていたことが明らかになった。

性別に関して、金ら⁷⁾ 棚崎ら⁸⁾の認知症の人に対する調査では男性より女性の方が有意に肯定的評価であったと述べている。今回の調査で看護学科の方が肯定的イメージであったことは、医学科よりも有意に女性が多いことが影響している可能性がある。

イメージの項目に関しては、看護学科は医学科よりも明るく柔軟で強く愛想が良く敏感で暖かくやさしく好きだといったイメージを持ち、認知症高齢者を好意的にとらえていることがわかる。田中ら⁹⁾は、看護学生の認知症高齢者に対する親しさや認知

症高齢者を受け入れようとする心の動きは、講義や演習はもとより臨地実習によって好意的を志向し、さらに、臨地実習はその志向を卒業直前まで維持する重要なものであると述べている。本研究でも、看護学科の認知症高齢者との関わりの内容はほとんどが実習であった。実習を通して今まで学んできた知識やケアが統合され、認知症高齢者と実際に関わる経験値が認知症高齢者の肯定的イメージにつながっていることが考えられる。

本研究では、学習背景や経験、性別が異なる他職種では、イメージの持ち方が違うということが明らかとなった。その中で個別性のある医療を提供するためには、職種間でのイメージの差を縮めることが重要である。まずは、認知症高齢者に肯定的イメージを持つ看護師がその人らしさを見つけ、適切なケアを提供することが必要である。さらに、学習背景や経験の異なる他職種は違うイメージを持つということを理解し、認知症高齢者への偏った見方で尊厳が脅かされないよう、個別性や関わり方など具体的な情報をチームの中心となって発信することが看護師として重要な役割であることが示唆された。

本研究では、対面ではなく、Google フォームを用いた調査であったため、回収率が低かったことや B 大学に限定して調査したことから一般化するには限界がある。今後対象者の拡大を行い、調査を行う必要がある。

謝辞

本研究の調査にご理解・ご協力いただきました B 大学の医学科 6 年生と看護学科 4 年生の皆様へ深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 内閣府：平成 29 年版高齢白書：高齢者の健康・福祉 (https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2017/html/gaiyou/sl_2_3.html) (2021 年 9 月 30 日閲覧)
- 2) 岡村絹代, 嶋田さおり, 土幡淳, 他 (2015)：愛媛県愛南町における認知症になっても暮らしやすい町づくりの推進—地域住民の認知症に関する意識調査の結果から—, 愛媛県立医療技術大学紀要, 12 (1) : 37-45
- 3) 金高蘭, 黒田研二, 下菌誠, 他 (2011)：認知症の人に対する地域住民の態度とその関連要因, 社会問題研究, 60 : 49-62
- 4) 西山沙百合, 荒井佐和子, 瀧川真也 (2018)：認知症の症状および介護に関する知識と認知症高齢者イメージとの関連, 川崎医療福祉学会誌, 28 (1) : 231-239
- 5) 桂晶子, 佐藤このみ (2008)：看護大学生が抱く認知症高齢者のイメージ, 宮城大学看護学部紀要, 11 (1) : 49-56
- 6) 古谷野亘, 児玉好信, 安東孝敏, 他 (1997)：中高年の老人イメージ—SD 法による測定—, 老年社会科学, 18 (2) : 147-152
- 7) 金高蘭, 黒田研二 (2011)：認知症の人に対する態度に関連する要因—認知症に関する態度尺度と知識尺度の作成—, 社会医学研究, 28 (1) : 43-56
- 8) 棚崎由紀子, 奥田泰子, 光貞美香, 原哲也, 河野保子 (2011)：看護学生のグループホーム実習における認知症知識及び認知症高齢者のイメージの変化とその要因の検討, 宇部フロンティア大学看護学ジャーナル, 4 (1) : 51-60
- 9) 田中敦子, 鳴海喜代子 (2005)：認知症高齢者への看護学生の受容的感情とその影響要因に関する縦断的調査, 埼玉県立大学紀要, 7 : 59-66